

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	若井（澁江） 裕子
2. 審査委員	主査：（鳴門教育大学教授） 葛西真記子 副主査：（兵庫教育大学教授） 市井 雅哉 委員：（岡山大学教授） 上地雄一郎 委員：（鳴門教育大学教授） 山下 一夫 委員：（鳴門教育大学教授） 田村 隆宏
3. 論文題目 アタッチメントとレジリエンスの関連 ー獲得された安心感や修正アタッチメント体験の視点からー	
4. 審査結果の要旨 学校教育実践学専攻学校教育臨床連合講座 若井（澁江）裕子 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：平成26年1月25日（土） 午後14時から15時 場所：鳴門教育大学 人文棟6階 A3会議室 1. 学位論文の構成と概要 本論文は、以下に示す全5章から構成されている。 第1章 問題と目的 第1節 問題の背景 第2節 本論文の目的 第3節 先行研究（レジリエンス、アタッチメント、獲得安定型） 第2章 研究Ⅰ：心的外傷体験をもつ女兒の教育場面におけるレジリエンスとアタッチメントの検討ー書籍の会話分析を通してー 第1節 問題と目的 第2節 書籍に関する検討 第3節 方法 第4節 結果と考察 第5節 第2章の総合考察 第3章 研究Ⅱ：アタッチメントとレジリエンスの関連に関する質問紙調査ー獲得された	

安心感の視点を踏まえた検討—

第1節 問題と目的

第2節 獲得された安心感尺度の作成

第3節 方法

第4節 結果

第5節 第3章の考察

第6節 今度の課題

第4章 研究Ⅲ:アタッチメントとレジリエンスの関連に関する面接調査—獲得された安心感を踏まえた検討—

第1節 問題の背景

第2節 本研究の目的と仮説

第3節 方法

第4節 結果と考察

第6節 第4章の総合考察

第5章 総合考察

各章ごとの論文概要は以下に示すとおりである。

第1章では、本論文の問題の背景と目的が述べられた。本論文では精神的な健康と関連すると推察されるレジリエンスやアタッチメントに着目し、その先行研究を概観した。先行研究の指摘から、アタッチメントとレジリエンスは関連するという仮説を立て、それらの関連を量的、質的に検討する必要性を示し、本論文の構成を記した。

第2章では、研究Ⅰとして、ネグレクト、身体的虐待、心理的虐待、DV、貧困など、PTSDを発症し得るような過酷な成育歴を有し、殺人未遂や暴言などの問題行動を多発させていた6歳女児が、献身的な担任教師との相互作用を通して問題行動を減少させていった事例（書籍）を分析した。そして、誰もが経験するようなストレスフルな環境へのレジリエンスではなく、通常は経験せず、PTSDを発症し得るような大きなストレスへのレジリエンスの発揮や育成過程を、担任教師とのアタッチメントという視点から分析した。その結果、教師の終始一貫した言動が、児童に安心感を与え、その安心感は、児童がすでに形成していた不安定なアタッチメントスタイルを修正したことが示唆された。

第3章では、研究Ⅱとして、重要な他者から獲得された安心感は、個人の不安定なアタッチメントを修正し、レジリエンスの発揮や育成に貢献し得るとの仮説を立て、重要な他者から獲得される安心感を測定する尺度を作成し、レジリエンスやアタッチメントを測定する尺度と併せて実施した。その結果、①アタッチメントの安定下位尺度とレジリエンスには正の関連があること、②アタッチメントのアンビバレント下位尺度とレジリエンスには負の関連があるが、アンビバレントクラスターに分類され、レジリエンス得点が高い人は、両親以外の重要な他者から得た安心感が高かったこと、③アタッチメントの回避下位尺度はレジリエンスと関連がな

いことが明らかになった。

第4章は、研究Ⅲとして、研究Ⅱと同様の質問紙調査に併せて、アタッチメントに関するエピソードや重要な他者との関わりを問うための面接調査を実施し、アタッチメント、レジリエンス、獲得された安心感を質的に検討した。そして、①重要な他者（SO）から獲得された安心感が必ずしもアタッチメントと関連するわけではないこと、②幼少期に形成されたアタッチメントスタイルや内的作業モデル（IWM）がその個人に与える影響は大きいこと、③SOがその個人が有している不安定なアタッチメントスタイルを修正したり補足したりすることも可能であること、④親のような愛情を伴った、一貫して継続的なSOの支援は、その個人がすでに有していた不安定なIWMと現実との間に乖離を生じさせ、そのことによって幼少期に形成されたアタッチメントスタイルやIWMの影響力を弱められる可能性があることが明らかになった。

第5章は、総合考察として、レジリエンスにはアタッチメントが概ね影響しており、幼少期における養育者の関わりが、その個人に与える影響が大きいことが明らかとなったことを受けて、人間には自分の人生を切り拓く力、すなわち、自分の人生が自分の置かれた環境によって左右されるのではなく、自分の人生を自分で選択し、変化させることもできるという可能性を有していることも示唆された。そして、そのような自分の人生を切り拓く際に、教師などの第三者の支援が有効になり得ることを述べた。

2. 審査経過

問題の提起から研究の目的、方法への導き方、臨床実践に基づいたデータの収集と分析、その考察と議論いずれの段階も論理的であり、精度の高い実証的研究が行われていた。特に、協力者の得られにくい外傷体験の事例として書籍の会話分析を採用したこと、過酷な成育歴を持つ者への詳細なインタビューを行ったことなど、臨床素材を客観的・科学的な論文として提示するために採用された研究方法、様々なデータから帰納法的に理論を導き出す過程など独創的な研究であることが確認され高く評価された。

今後の発展として、様々な困難な状況において高いリスクにさらされている子どもたちへ臨床心理士として、あるいは学校現場での教員やスクールカウンセラーとしての関わりのある方についての新たな提言が行えるような実践研究や、作成された「獲得された安心感尺度」を用いてのさらなる実証研究などが示唆された。

このように、高い独創性と発展性をもった研究知見が導き出され、臨床場面や学校現場でのさらなる応用可能性が示唆された本研究は、今後教育、心理、社会に大きく貢献するものと判断された。

3. 審査報告

以上により、本審査委員会は、若井（澁江）裕子の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。